

スラヴォイ・ジジェクの グローバル資本主義分析の検討

『はじめは悲劇として、二度目は笑劇として』(2009) の批判的読解を通じて

萩原優騎 *

はじめに

ナオミ・クラインの *The Shock Doctrine* の邦訳 (邦題『ショック・ドクトリン』) が 2011 年 9 月に刊行された。戦争や災害を絶好の機会と捉えて活動を展開する資本主義の営みを告発するこの著作は、これまでも多くの知識人たちによって言及されてきた。邦訳の「訳者あとがき」でも触れているように、3 月に発生した東日本大震災以降、日本の置かれた状況を分析する枠組みとして、クラインの名が挙げられる機会が増えたように思える。⁽¹⁾ しかし、クラインの議論の射程は、特定の災害状況における資本主義の活動を記述するにとどまらない。資本主義がこれまでの歴史の中で戦争や災害をどのように利用してきたのかという、よりマクロな視点から構想されている。この視点に着目して、クラインの議論に依拠しつつ資本主義社会の分析を展開している一人が、スラヴォイ・ジジェクである。ジジェクは、ラカン派の精神分析とマルクス主義を主要な理論として、社会の様々な事象を分析する人物である。ジジェクは自身の問題関心に引きつけてクラインに注目し、今日の資本主義社会を分析する他の理論との関連で議論を展開している。その論点を辿り考察することは、グローバル化が進む状況に対する諸々の社会分析の関係を問うことにもなる。そもそも、クラインの議論は、どこまで日本の現状に当てはめられるのか。この問題は、十分な検討を要するはずである。そうした作業なしになされる不用意な状況理解に陥らないためにも、ジジェクの論考に目を向けることには一定の意義があると思われる。

本稿では、ジジェクがクラインの議論に言及している、*First as Tragedy, Then as Farce* (邦題『ポストモダンの共産主義——はじめは悲劇として、二度めは笑劇として』) を、上記の観点から読解することを試みる。したがって、ここで論じる内容は、

* 国際基督教大学社会科学研究所研究員、国際基督教大学教養学部非常勤講師

同書で扱われている事柄の一部に過ぎず、ジジエクが主題として議論を展開している
コミュニズムの問題を中心として検討するわけでもないことを、あらかじめ断ってお
きたい。最初に、ジジエクが考察の出発点に置いている、「歴史の終わり」論のオプティ
ミズムと9.11同時多発テロ以降の状況変化について扱う。グローバル資本主義の今
日の様相は、9.11のインパクトを無視できない一方で、それ以降に突如として生じた
ものではないと、クラインは論じている。この考察に、リスク社会論や再帰的近代化
論といった、近代社会の進展を分析する社会理論を重ねて読解することを、次に試み
る。それにより、近代化と資本主義をめぐるジジエクの指摘の重要な点が、より明確
になるはずである。これを媒介とすることで、「文明の衝突」と呼ばれる現象につい
てのジジエクの見解を、より深く理解できると考える。もう一つの重要な論点は、経
済状況の悪化やテロ事件の続発など、社会秩序の不安定化が進行する場面で、人々の
認識がどのようになっているのかということである。この点について、ジジエクの考
察を詳細に検討し、最後にその問題点と今後の可能性を示す。

I. 資本主義社会の新たな状況

1. 歴史の終わり

現代は、資本主義経済が地球上の多くの地域に浸透した時代である。それを資本主
義の勝利と見るか、あるいは別の評価を下すかということは、議論が分かれる。しか
し、冷戦崩壊後に蔓延した楽観論が現在では通用しなくなっていることは、多くの論
者が認めるだろう。⁽²⁾ スラヴォイ・ジジエクによれば、2001年の9.11同時多発テロ
と2008年の金融大崩壊で、ブッシュ大統領が発したコメントがよく似ているという。
「ブッシュはいずれの場合にも、アメリカ的生活様式が危機にさらされており、速や
かに断固として危機に対処すべきだと訴えた。いずれの場合にも、アメリカ的価値観
（個人の保障、市場資本主義）を守るために、まさにその価値観を一時的に留保す
ることを求めた」。⁽³⁾ では、ここで守ろうとしているアメリカ的価値観なるものは、十
分に機能しているのだろうか。特定のイデオロギーが強固に主張され、実行に移さ
れるということは、それが実効性を持っているということには等しくない。

この点について、ジジエクはマルクスに注目し、社会秩序の効力とはどのようなも
のであるのかということを指摘する。「体制が『自らを信に足ると思ひこむ』という
図式は、支配的イデオロギーが本来もつ行為遂行力（“象徴としての効力”）が消え去
ったことをみごとに捉えている。それはもはや社会をまとめる基本構造として機能して

いないのだ。そして今日のわれわれもまた同じ状況にあるのではないか？現代リベラル民主主義の主唱者、実践者も『自らを信に足ると思ひこ』んでいないか。それどころか、現代のシニシズムを表現するには、マルクスの図式を裏返したほうが適切ではないだろうか——われわれは自らのイデオロギーを『本気で信じて』はいないと思ひこんでいる、と。そう思ひこんでいながら、そのイデオロギーを実践しつづけている。信じていると自覚しているよりはるかに多くを信じている」。(4) このような事態を観察できるようになったのは、従来のイデオロギーが自明なまま機能していた状況が変わってしまったからである。

ジジェクによれば、その変化が生じたのは冷戦終結の時期だったという。1989年、ベルリンの壁が崩壊した。ジジェクは、これを「幸せな90年代」の始まりと形容し、その典型としてフランシス・フクヤマの「歴史の終わり」論を挙げる。「リベラル民主主義が大筋で勝利をおさめた、グローバルなリベラル共同体の到来が間近に迫っている、そして、このハリウッド風のエンディングに向けての障害となるのは実験的で偶発的なもの（指導者がもう自分の出る幕ではないことを悟っていない各地の抵抗勢力など）にすぎない——誰もがそう信じかけていた」。(5) もちろん、フクヤマの議論はこれほど単純ではない。(6) ポスト自由民主主義の歴史形態が現時点で見当たらないということは、自由民主主義の秩序が今後も安泰であり続けるということを保証するものにはならないからである。ジジェクが述べていることは、フクヤマの著作が当時、多くの人々にどのように受け止められていたかということを示していると捉えるべきだろう。フクヤマの言説の細部を確認しないまま、自由民主主義の秩序が完全なものとして、地球全体を覆い尽くす日も近いかのように受け止められたことは確かだろう。

ところが、9.11同時多発テロ事件が、状況を大きく変えてしまった。その結果、「新たな壁」が各地に出現したとジジェクは述べる。「新たな壁」は、経済面においても現れているという。富裕層と貧困層の生活が完全に分断され、互いに無関係であるかのように共存している社会が世界中に出現していることが、その例である。「かくして、1990年代にフクヤマが示したユートピアは二度死ななければならなかったようだ。つまり9.11によって、リベラル民主主義の政治ユートピアは崩壊したが、グローバル市場資本主義の経済ユートピアは揺るぎはしなかった。2008年の金融大崩壊に歴史的な意味があるとすれば、それはフクヤマが夢見た経済ユートピアの終焉のしるしであるということだ」。(7) テロに対してアメリカは宣戦布告し、正義や自由の理念を掲げて対抗した。しかし、先述のように、そのことはアメリカの従来の社会秩序を

構成してきたイデオロギーが、変わりなく機能し続けているということには等しくない。さらに、ここ数年間において経験された、経済的な面での状況変化も重なる。冷戦崩壊時に多くの人々が持っていた楽観的な認識が、ますます揺らいできたという意味では、今日の状況は、まさに「歴史の終わり」のオプティミズムの終わりと表現できるのかもしれない。⁽⁸⁾

2. ショック・ドクトリン

オプティミズムの終わりにおいて、人々はこれまで以上に不安定な状況に直面する。一例として、2002年のエンロン破綻について、ジジエクは「リスク社会という概念の皮肉な例証」と表現する。「仕事と預金を失った何千人もの従業員は明らかにリスクにさらされたが、現実には選択の余地はなかった——リスクは彼らには見えない運命だったのだ。これに対し、関連のリスクを見抜いており、状況に干渉できる権限も有していた者たち（つまり経営幹部）は、破綻前に株式やオプションを換金することで、自分のリスクを最小限に抑えていた。現代社会にリスクな選択がつきものであるのは確かだが、じつは選択するのは一部の人間だけで、その他おおぜいはリスクを冒すだけの社会なのだ」。⁽⁹⁾ 「リスク社会」とは、ウルリッヒ・ベックが社会学の領域で提唱した概念である。リスクが社会の構成員に対して全く同じように影響するわけではないという論点は、ベックの考察の中にも見られる。ベックの表現では、リスクが下方へ集中するということ、下層階級においては生活が困窮するばかりでなく、安全性も脅かされやすいということである。⁽¹⁰⁾ そのことは、人々がリスクとどのように関わるかという点にも確認できる。リスクに曝されていると認識できるのは、高学歴者や情報感度の高い人間であるゆえに、逆説的にも豊かで安全な国々においてリスクに対する人々の認識が向上すると、ベックは論じている。⁽¹¹⁾

リスクの増大という事態は、私たちに何をもたらすのだろうか。「この金融危機が目覚めるきっかけとなり、夢から覚めることになるだろうか？すべては、この危機がどのように象徴化されるか、この危機がどのようなイデオロギー的解釈や説明のもとで一般に理解されていくかにかかっている」とジジエクは論じる。⁽¹²⁾ ここでジジエクは、金融危機に対する資本主義批判の言説への楽観視を戒めている。すなわち、危機を通じて人々が覚醒して状況が改善されるどころか、逆に人種問題や貧困問題の悪化が懸念されるということである。「危機によってぬるま湯から揺すり出され、生活の土台に不安を覚えざるをえなくなれば、最初に起こるごく自然な反応はパニックであ

り、次いで『基本へ立ち戻ろう』ということになる。そこで支配的なイデオロギーの基本的な前提が、疑問に付されるどころか、いささか強引に重ねて主張される。だから危険なのは、なおも進行中の金融危機が、ナオミ・クラインが『ショック・ドクトリン』と呼んだものと同様のしかたで利用されることだ。⁽¹³⁾

ジジェクが述べていることをより明確にするために、クラインが『ショック・ドクトリン』で展開している議論を見てみたい。クラインによれば、彼女が「ショック・ドクトリン」と呼ぶものを観察できる一例は、2005年にアメリカ南部を襲ったハリケーンによる災害である。「壊滅的な出来事が発生した直後、災害処理をまたとない市場チャンスと捉え、公共領域にいっせいに群がるこのような襲撃的行為を、私は『惨事便乗型資本主義』と呼ぶ」。⁽¹⁴⁾ クラインが指摘しているのは、土地の管理や開発に限ったことではない。経済学者ミルトン・フリードマンが、この災害をきっかけに教育面での改革を唱えたという例を挙げている。公立の学校のシステムを再建する代わりに、私立の学校にも公的援助を支給することで競争を促し、それによって教育の向上を目指すという意図で、バウチャー制度の導入が提唱されたという。⁽¹⁵⁾ 日本では、2011年3月の東日本大震災発生後の状況に、クラインの議論を当てはめた言説が多く見られる。しかし、クラインの議論は災害に限定されるものではなく、むしろ資本主義がこれまでの歴史を通じて様々な場面において、同様の手口を使って自らの勢力を拡大してきたという点を強調している。

この手口を、クラインは「ショック・ドクトリン」と呼ぶ。「深刻な危機が到来するのを待ち受けては、市民がまだそのショックにたじろいでいる間に公共の管轄事業をこまぎれに分割して民間に売り渡し、『改革』を一気に定着させてしまおうという戦略だ」。⁽¹⁶⁾ クラインによれば、1973年にピノチェトがチリで軍事クーデターを起こした際にも、同様の手口を確認できるという。1970年代半ば、フリードマンはピノチェトの経済顧問であった。当時、クーデターによるショックの只中であつた人々は、ピノチェトによる様々な改革の強行に抵抗する術がなかった。「フリードマンは、意表を突いた経済転換をスピーディーかつ広範囲に敢行すれば、人々にも『変化への適応』という心理的反応が生じるだろうと予想した。苦痛に満ちたこの戦術を、フリードマンは経済的『ショック治療』と名づけた」。⁽¹⁷⁾ そして、それはさらに展開を遂げていく。「より大規模で衝撃的な惨事が煽られるようになったのはたしかだが、イラクやニューオーリンズで取られた手法は、9.11以降に考案されたものではない。イラクやニューオーリンズでの惨事便乗型の大胆な実験は、過去30年実行されてきたショック・ド

クトリンが頂点をきわめた姿なのだ」。(18)

3. 近代化の徹底

クラインの指摘を、ジジェクらがリスクに関して述べていたことと重ねてみたい。上述のように、ショック・ドクトリンは9.11以降の発明品ではなく、それ以前から存在し、進化を遂げてきたものである。一方、「リスク社会」という新しい状況が出現しているとベックが指摘したことに、先程触れた。この二つは、矛盾するわけではない。ベックによれば、リスク社会の出現は、従来の産業社会の延長上に位置づけられる現象である。産業社会の変動が、自らの諸前提と輪郭を解体し、別のモダニティへの道を切り開くという、モダニティの徹底化である。(19) このような変化を、ベックは「再帰的近代化」と呼ぶ。すなわち、産業社会の進展は、その自己言及的な変化をもたらしたということである。モダニティの徹底化という視点をベックと共有するアンソニー・ギデンズは、ジャン＝フランソワ・リオタールが定義した意味での「ポストモダン」という概念を、再帰的近代化の観点から批判する。リオタールによれば、メタ物語という正当化の機能を担う語りが衰退することで、増殖する無数の物語が日常生活を構成していく状況が、ポストモダニティである。(20) しかし、そうした状況は近代の終焉ではなく、その徹底化による自己言及的な変化の結果として生じたものであると、ベックやギデンズは考える。

ただし、リオタールがポストモダンを定義し、モダニティの状況変化を告げたことには一定の意義があると、ジジェクは評価している。「新しいイデオロギー形態としてのポストモダニズムに対してはもっともな批判が多かったものの、ジャン＝フランソワ・リオタールが著書『ポスト・モダンの条件——知・社会・言語ゲーム』で、この語をただの新しい芸術傾向(とりわけ文学と建築の)から新時代を画するものへ格上げしたとき、それはまさに真正の任命行為であったと認めるべきなのだ。『ポストモダニズム』はいまや事実上、この混沌とした歴史的経験に明瞭さという新秩序をもたらす新たな〈主人のシニフィアン〉として機能している」。(21) ここで言う〈主人のシニフィアン〉とは、現状の特徴をまとめ上げて名指すことによって象徴化を果たすものとして、理解してよいだろう。この概念に関連する問題については後述するが、まず確認しておきたいのは、従来のモダニティが変化を遂げた状況にあるという認識は、リオタールにしてもギデンズにしても、論者の立場の違いを超えて、ほぼ共有されているということである。

ある面では秩序の不安定化に直面している資本主義社会では、その状況にどのように対応しているのだろうか。「現在の危機における支配的イデオロギーの中心課題は、経済崩壊の責任をグローバル資本主義システムそのものに帰すのではなく、二次的、偶発的なシステムからの逸脱（あまりに手ぬるい法規制、巨大金融機関の腐敗など）のせいだと言いつのることだ。〈現実に存在した社会主義〉の時代に、社会主義に賛同したイデオロギー主唱者がこの思想を守ろうとして、『人民民主主義』の失敗は社会主義まがいのものだったからであり、思想自体の失敗ではないと主張したのと同様だ。したがって、既存の社会主義体制には抜本的改革は求められるが、転覆や廃止の必要はないのだと。この社会主義の擁護を、かつては幻想だとあざけり、責任は思想そのものに負わせるべしと主張した側のイデオロギー信奉者たちが、まったく同じ論法で自分たちを弁護しているとは皮肉なものだ。資本主義それ自体に非はない、実行の過程で歪曲されたものが破綻しただけだ……と彼らも言うのだ」。(22) ジジェクがこのように指摘するのは、そこにショック・ドクトリンが機能する契機があるからだ。「危険なのは、この恐慌について主流となった説明が、われわれを夢から覚ますどころか、夢を見つづけさせてくれることだ。ここで危惧すべきは、恐慌が経済に与えた結果のみならず、経済活動の原動力として『テロとの戦い』や他国への干渉主義を再燃させたり、少なくとも、より厳しい『構造調整』策を途上国に強いるのに危機を利用したりできる、そういった誘惑が明らかに存在することだ」。(23)

II. 状況変革のための理論と実践

1. 環境問題への対応

以上に見たように、クラインは災害や紛争がショック・ドクトリンの推進において利用されてきたことを、過去の歴史の中に読みとっている。そしてジジェクによれば、環境問題に関する言説も、ショック・ドクトリンと同様の効果を持ち得るといえる。すなわち、グローバルな環境破壊が、かつてない規模の資本投下に道を開き、その活性化をもたらすという可能性である。(24) そこでは、エコロジーの名の下に様々な経済活動の正当性が主張され、これらに対して人々は無批判になり得る。それゆえ、環境問題への対応について技術的な解決という観点からのみ捉えようとすることに對して、ジジェクは注意を促す。このような立場は、全くの誤りであるという。「エコロジーの問題に対しては、何を生産し、何を消費し、どのエネルギーに依存するか——つまりは生活の根幹にかかわる選択と決断が求められる。だから技術的ではすまない

し、社会の基本的選択に関して、もっとも根本的な意味できわめて政治的なことなのだ」。(25) そこに関与してくる行動主体の目的もそれぞれ異なるはずであり、環境保護が第一の目的であるとは限らない。

経済活動の活性化が政治的に図られた例として、クラインはアメリカのブッシュ政権を挙げている。惨事便乗型資本主義の実践として「テロとの戦い」とそれ以降の状況の進展を捉えるならば、そこにはアメリカ経済の活性化に向けての数々の動きを確認できる。「わずか数年のうちに惨事便乗型資本主義複合体は、テロとの戦いから国際平和維持活動、自治体の警備活動、頻発する自然災害の対処までと、次々に市場を広げていった。複合体の中核をなす企業は、営利追求型の政府モデル——非常事態において著しく急速に発展する——を、日常的な国家機能にも定着させることを最終目標とする。つまりは政府の民営化である」。(26) リスクを契機に雇用が生まれるというのは、研究開発の分野にも当てはまるはずであり、ベックは既にそのことを指摘していた。何をリスクとするのかということは、状況依存的である。「社会の価値観や利害関心が、何が問われ何が明らかにされるか、何が放置されるかを左右し、科学的・客観的な事実の認識においても、どんな種類の事実に光が当てられるかが変わってくる」のであり、「フレーミングを通じて価値が事実を縁取るのである。その意味で、客観的で科学的だとされるリスクアセスメントも、意識しようとしまいとに拘わらず、常に何らかの科学外の社会的価値前提に拘束されている」。(27)

したがって、場合によっては、これが新たな雇用の創出の機会となり得る。リスクの定義を変えることにより、新しい需要と同時に市場が作られるということである。(28) このような場面では、関連する研究開発が正当なものとして評価されるか否かということが重要となる。それゆえ、新しい需要につながる研究開発の正当性をどのようにアピールするのかということと、そのためのスキルが問われる。例えば、研究成果の提示方法、説得力、縁故、メディアへの接近などにより、社会的な評価が高まる。(29) しかし、リスクに対する視点の変更が求められるということは、雇用を創出しようとする側だけに当てはまるわけではない。資本主義社会に批判的な立場のジジェクも、リスク社会という状況下では従来の視点の見直しが必要であると説く。「世界を連帯させる絆とは、現代に生きるわれわれが、プロレタリアートの古典的イメージ『束縛の鎖以外には失うものなど何もない』とは大違いで、すべてを失う危険にさらされていることだ」。(30) 今日のリスク社会では、人類の生存の基盤そのものが触まれている。ベックが「リスク社会」という概念で強調したのも、同様の事態だった。

社会には様々な格差が依然として存続する一方で、リスクの影響は、それを作り出す者にも利益を受ける者にも及び、誰もが無関係ではいられなくなるということである。⁽³¹⁾

2. 文明の衝突？

誰もがその影響下にあるリスク社会という状況は、文字通りグローバル化している。リスクのグローバル化の過程において、資本主義が大きな役割を果たしてきたことは言うまでもない。それは環境の危機だけでなく、諸々の地域や文化の間の関係をも再規定することとなった。ショック・ドクトリンの実例として挙げられていた9.11やイラク戦争に伴う様々な対立の激化は、まさにその例である。一方、「歴史の終わり」と対比して言及されることの多いものとして、サミュエル・ハンチントンの「文明の衝突」がある。この表現はイデオロギーとして機能し、ショック・ドクトリンの遂行にも利用されていると、クラインは批判する。「結集したエキスパートたちはトラウマ後の人々の意識につけ込み、無防備なキャンパスに新しい美辞麗句を書きこんでいった。いわく『文明の衝突』、あるいは『悪の枢軸』『イスラム・ファシズム』『国土安全保障』といった字句である。こうして人々が文明戦争勃発の恐怖に取りつかれるなか、ブッシュ政権は9.11以前には夢でしかなかったことを実現できるようになった。ひとつは国外で民営化された戦争を展開すること、もうひとつは国内にセキュリティー企業複合体を構築することである」。⁽³²⁾ ベックが指摘した、リスクを再定義することによる需要の創出を、ここにも確認できる。

「文明の衝突」という表現に対しては、村上陽一郎も批判している。「ハンチントンの『文明の衝突』という概念が間違っているのは、その概念そのもののなかに内在すると私は考える。つまり『衝突する』ような複数の文明が実は存在しない、というところに。今日の問題は、すべて、文明が『一つの形』となって地球全体を覆う方向に進んでおり、これに対抗すべき『文明』が存在しないところに集約されるのではないか。『9月11日』の悲劇にしても、武器に使われた旅客機やそれを支えるシステムのすべては、『唯一なる文明』の所産である。恐れられている生物兵器も化学兵器も、すべて同じことである」。⁽³³⁾ これは、ギデンズによるグローバル化の定義に重なる。すなわち、グローバル化とは、ヨーロッパに由来する諸制度を世界中に浸透させ、その過程で他の文化を押しつぶしていくものである。⁽³⁴⁾ ただし、確かに欧米文明の産物は世界中に浸透しているが、それによって他の文化の均質化が完全に実現したというわけ

ではない。近代的な要素が世界中に拡大していくにつれて、欧米文明の世界規模の覇権が徐々に衰退しているという側面もあることを、ギデنز是指摘している。⁽³⁵⁾ 欧米文明が自らの産物を他の文化に浸透させるにつれて、逆に自らを脅かし得るものが各地に出現する。この現象を、村上是「文明のパラドックス」と呼ぶ。諸文化のアイデンティティは、文明の持つ力学的作用によって初めて確立されるということ、個々の文化の独自性の自覚に基づく個別性尊重の要求は、文明と諸文化との相互作用の中で育っていくということである。⁽³⁶⁾

このように、グローバル化の進展は、ローカル化をも引き起こす。この運動においては、ローカルの極とグローバルの極の両端で、人々が大規模なシステムに結びつけられていくと、ギデنزは論じる。⁽³⁷⁾ グローバル化を推進するこの大規模なシステムこそ、資本主義である。そのような資本主義の特徴について、ジジェクは以下のように指摘する。「資本主義ははじめて意味を解体した社会・経済制度である。意味のレベルでは、それはグローバルではない（グローバルな『資本主義世界観』だの『資本主義文明』だのは、いっさい存在しない。グローバリゼーションの基本となる教訓は、資本主義がキリスト教からヒンズー教、仏教まであらゆる文明に順応できるということに他ならない）。資本主義の推進力によって近代の産物が世界中を覆い尽くすことが「歴史の終わり」の一側面であるとすれば、それは「文明の衝突」と表現された個々のローカリティの活性化と矛盾するわけではない。むしろ、欧米文明への抵抗を試みる原理主義勢力の主張や行動手段がグローバル化の産物である以上、そこに見られる宗教的な対立はグローバル資本主義に適した闘争形態であり、「文明の衝突」は「歴史の終わり」の一面であるということになる。⁽³⁸⁾

ジジェクによれば、上記のような資本主義の性質ゆえに、その影響下にある個々のローカリティもまた変質する。「どれほど深く特定の文化にコミットしてしようと、グローバル資本主義に参加した瞬間にその文化は非帰属化され、抽象的デカルトの主体にたまたま特有のひとつの『生活様式』と化す」。⁽³⁹⁾ これは、ベックやギデنزが「脱埋め込み」《dis-embedding》と表現した事態にほかならない。それは、社会関係を相互行為のローカルな脈絡から切り離し、時空間の無限の拡がりの中に再構築することである。⁽⁴⁰⁾ もちろん、脱埋め込みを遂げたからといって、それぞれの文化がその特徴を失うわけではない。既に論じたように、それぞれの文化は欧米文明との関係の中で、再帰的に変容を遂げる。そこでは、社会や文化の影響下で成立している人々の関係やアイデンティティも、従来と同じ状態を保つことはできない。認識主体としての個人

も、再帰的に自身を位置づけ直すのである。それゆえ、「ここでは宗教がその役割を再創造し、資本主義制度という意味なき世界への参画者たちに有意義な人生を保障するという使命を発見しつつある」とジジェクは述べる。⁽⁴¹⁾ これは宗教に限らず、通俗化された心理学的言説をはじめ、個人のアイデンティティの形成や変容に関わる様々な制度や装置が活用されることになる。⁽⁴²⁾

3. 知っていると思定される主体

こうして、グローバル化の進展に伴う再帰化は、社会レベルと個人レベルの両方に確認できる。再帰化が進むということは、それぞれの場に生きる人々を形成し方向づけてきた秩序や習慣も、従来のままの状態では維持されがたくなるということである。このような状況での社会と個人の関係に関して、ジジェクはラカン派の精神分析家ジャック＝アラン・ミレールが金融危機について述べたことを引用して説明する。「貨幣というシニフィアンはひとつの仮象であって、社会習慣に基礎を置いている。金融の世界はフィクションで構成され、その主役は、なぜかを、どうしたらいいかを〈知っていると思定される主体〉とラカンが呼ぶものだ」、「金融界のプレーヤーはこの〈主体〉にもとづいて行動する。過剰反応しがちな架空の個体たちは、権威が『信じること』に従う。つまり、〈知っていると思定される主体〉に感情転移する。もしこの〈主体〉がつかまざらば、危機が生じ、土台が崩れ、当然パニックという結果になる」、「〈知っていると思定される主体〉が再構築されるまで危機はつづくだろう。それは長い目で見て、新時代のプレトン・ウッズ体制として、真実についての真実を語ることが課される評議会として、現われることになるだろう」。⁽⁴³⁾

ジジェクは、この発言を次のように解説している。「あの奇妙な文章のメッセージは明らかだ。新しい〈知っていると思定される主体〉の出現を辛抱強く待とう、というのである。ここでのミレールの立場は、純然たるリベラルなシニズムのそれだ。われわれはみな〈知っていると思定される主体〉が移ろいゆく幻想だと承知している——だが、精神分析学者として『非公式に』知っているのだ。『公式に』は、パニック反応が起きることを抑えるために、新しい〈知っていると思定される主体〉の登場を促さなければならない」。⁽⁴⁴⁾ 〈知っていると思定される主体〉の喪失について、ジジェクは別の機会に詳述している。今日のリスク社会において、これまで直面したことのなかった種類の新たな問題が続出している状況を、以下のように分析する。「ありとあらゆる領域において、しかるべき倫理的な行動を規定した基本マニュアルの創出に

真正面から取り組むよう迫られているが、そのような事態は取りもなおさず、大文字の〈他者〉、すなわち、安心かつ絶対的な信頼を寄せうる倫理的不動点を提供するはずの象徴的な準拠の一切が、われわれの手から失われてしまったことに起因するものなのだ」。(45) 次々に開発される科学技術によってもたらされる、これまで経験したことのない問題群に対して、既存の倫理規範では必ずしも対応しきれなくなっている。そのことは、それらの倫理規範を自明な前提とすることで維持されてきた社会秩序の不安定化にもつながり得る。

ただし、こうした事態に直面しているということは、国家の衰退を単純に意味するわけではない。そこに見られる状況を、ポストモダンにおける一種の矛盾としてジジエクは捉える。例えば知的所有権の問題で起きていることは、古典的なマルクス主義が論じたような「搾取」ではなく、直接的法的措置という非経済的手段によって搾取が行われているという。(46) このことから、国家が依然として一定の役割を担っていることが分かる。「理論上は規制緩和や、『反国家』、ノマド的、脱領土化を志向しながらも、『生成する超過利潤』を引き出すという重要な傾向は、国家の役割が強化されることを示唆し、国家の統制機能はこれまで以上にあまねく行きわたっている。活発な脱領土化と、ますます権威主義化していく国家や法的機関の介入とが共存し、依存しあっている」。(47) ジジエクの言う〈知っていると思定される主体〉の喪失という事態には、確かに社会秩序の一定レベルの不安定化という側面があるとはいえ、その不安定な状況は、近代国家の終焉という意味でのポストモダンに等しいわけではない。むしろ、モダンの徹底化の結果として、再帰的に生じた状況であると言えるだろう。

おわりに

これまで見てきたように、クラインが提起したショック・ドクトリンの問題を、ジジエクは他の社会理論と関連づけて考察を展開している。そこから明らかになったのは、ショック・ドクトリンの発展は、近代化が徹底すると共に、その影響がグローバル化によって各地に及んでいく過程でもあったということである。ジジエクが言うように、ショック・ドクトリンのような効果が環境問題への取り組みの場面でも確認できるとすれば、リスク社会という再帰的近代化の進行によって生じた状況に、まさに適合したものであると言えるだろう。そしてジジエクが注意を喚起するのは、〈知っていると思定される主体〉をめぐる問題は、資本主義に固有の問題ではないということである。〈知っていると思定される主体〉は、資本主義を批判してきた側にも自明

であり続けてきた。それゆえ、「革命がもはや〈大文字の歴史〉の流れにのって〈大文字の法則〉に従って進んではない、という点は重要ではない。〈大文字の歴史〉などは存在せず、歴史とは開かれた偶発的なプロセスなのだから。ここでの問題は、あたかも〈歴史の法則〉という明快かつ支配的な歴史の発展の流れがあるかのようだが、革命はその裂け目で『流れに逆らって』のみ起こりうるということだ」。(48)

リオタールが宣告した「ポストモダン」の到来とは、あらゆる歴史を支配する法則としてのメタ物語の不在であった。人類の歴史はどこまでも進歩していくという進歩史観は、リスク社会という状況に直面することで挫折したかのようだ。しかし、ミレールの発言を引用してジジェクが論じたように、〈知っていると思定される主体〉が再び現れることへの期待は失われていない。ジジェクは言う、「新しい運動を起こすよりも、現在支配的な運動を中断させること。これが今日あるべき政治活動のすることだ。そのときベンヤミンのいう『神的暴力』にあたる行為は〈歴史の進歩〉という列車の緊急停止コードを引くという意義をもつだろう。言い換えれば、人は〈大文字の他者〉の不在を全面的に受け入れなければならない」。(49)「神的暴力」とは、ヴァルター・ベンヤミンが『暴力批判論』で定義した、秩序や歴史の連続性として経験される日常の自明性とその支配を打破する力のことである。現状を正当化する絶対的な根拠の不在を受容することを契機として、新たな可能性が生まれる。「歴史は直線的に発展するという見方の内側では考えられないこと、それは、自らの可能性を過去に遡って開く選択または行為という概念である。これはつまり、根源的に〈新しい〉ものの出現によって、過去が遡及的に変えられるということだ。もちろん、ここでいう過去とは、現実の過去ではなく（SFじゃあるまいし）、過去の可能性（正式な用語でいえば、過去についての様相命題の価値）である」。(50) 現時点で成立している自明性を相対化し、過去において実現していたかもしれない、未だ到来していない可能性に開かれる時、パースペクティブの再帰的な変容が実現し得る。

最後に、以上において検討したジジェクの議論に対して、留保しなければならない点があることを記しておきたい。第一に、別の機会に主題的に扱ったように、ジジェクが〈知っていると思定される主体〉の不在を論じる時、それが社会秩序の不安定化を指すのか、認識主体の不安定化を指すのか、曖昧である。(51) 両者が連動して生じているような印象を受けるが、秩序が不安定化したからといって、その影響下に生きる人々も不安定化するとは限らない。逆に、多くの人々の不安定化を観察できるということは、当該の秩序の衰退を必ずしも意味するわけではない。第二に、ジジェクの戦

略は政治レベルの話なのか、認識論的なレベルの話なのかという点が、やはり曖昧である。おそらくジジェクは、両者は不可分であると言うだろう。しかし、彼の試みる実践が、本当にコミュニズムへの完全なコミットメントなしには不可能であるのか、論証としては全く不十分である。第三に、ジジェクの考察は、社会状況の分析や認識の変革のための理論の提示にとどまっている。そうした理論の提示は、重要である。しかし、それらによって状況の相対化がなされた上で、次にどのように秩序や認識を再編成していくのかという点について、全く言及がない。⁽⁵²⁾しかし、これらの問題点を抱えているとはいえ、ジジェクが諸理論の相互の関連性を独自の視点から明確化し、さらなる考察の可能性を示していることには大きな意義があるはずであり、そのことを改めて強調しておきたい。

注

- (1) 特に邦訳の刊行以降、新聞紙上での言及が増えている。一例として、2011年10月10日付『朝日新聞』の「天声人語」欄。『震災以後を生きるための50冊』（『現代思想』2011年7月臨時増刊号）にも同書の解説があり、複数の論者が言及している。
- (2) 例えば、大澤真幸『現実の向こう』（春秋社、2004年）。フクヤマの論考が発表されて間もない時期から、「歴史の終わり」は単なる楽観論ではないとする見方もあった。加藤尚武は、次のように評している。『『社会主義は資本主義という未来をもつことになったが、資本主義の未来は何か』という問いが、突きつけられている。フクヤマ論文は、この問いに対して『資本主義に未来はない。歴史は終わった』という判断を大胆に主張している。勝利のオプティミズムをそのまま一種のニヒリズムに引き渡してしまう』（加藤、212-213頁）
- (3) Žižek (2009), p.1（邦訳8頁）
- (4) *Ibid.*, p.3（邦訳10-11頁）
- (5) *Ibid.*（邦訳11頁）
- (6) 詳細は、以下を参照。Fukuyama, Francis. *The End of History and the Last Man*, Penguin, 1992.（渡部昇一訳『歴史の終わり [上・下]』三笠書房、1992年。）
- (7) Žižek (2009), p.5（邦訳14頁）
- (8) ただし、自由民主主義とそれに対する人々のコミットメントの喪失という事態にまでは至っていないだろう。「フクヤマの『歴史の終わり』という概念をあざ笑うのはたやすいが、今日、多くの人がじつはフクヤマ主義者である。リベラル民主主義的な資本主義こそ、ついにさがしあてた、考える最善の社会の処方箋と認め、だから自分たちにできるのは、それをより公正に、寛容にするよう努めるぐらいだと思っている」とジジェクも書いている。（*Ibid.*, p.88 [邦訳149頁]）
- (9) *Ibid.*, pp.12-13（邦訳28頁）
- (10) Beck, S.254（邦訳317-318頁）
- (11) *Ibid.*, S.206（邦訳253-254頁）
- (12) Žižek (2009), p.17（邦訳36頁）
- (13) *Ibid.*, p.18（邦訳37頁）
- (14) Klein, p.6（邦訳5-6頁）
- (15) *Ibid.*, p.5（邦訳4頁）
- (16) *Ibid.*, p.7（邦訳6頁）
- (17) *Ibid.*, p.8（邦訳8頁）
- (18) *Ibid.*, p.11（邦訳11頁）
- (19) Beck, Giddens & Lash, p.3（邦訳13頁）
- (20) Lyotard, p.34（邦訳41頁）
- (21) Žižek (2009), p.52（邦訳92頁）
- (22) *Ibid.*, p.19（邦訳39頁）
- (23) *Ibid.*, p.20（邦訳40頁）
- (24) *Ibid.*, p.19（邦訳38頁）
- (25) *Ibid.*, p.25（邦訳47頁）
- (26) Klein, pp.14-15（邦訳15-16頁）
- (27) 平川、59頁
- (28) Beck, S.74（邦訳86-87頁）

- (29) *Ibid.*, S.277 (邦訳 346 頁)
- (30) Žižek (2009), p.92 (邦訳 156 頁)
- (31) Beck, S.28 (邦訳 29 頁)
- (32) Klein, p.20 (邦訳 22 頁)
- (33) 村上 (2003)、252 頁
- (34) Giddens, p.175 (邦訳 216 頁)
- (35) *Ibid.*, p.51 (邦訳 70 頁)
- (36) 村上 (1994)、235 頁 グローバル化の統合という作用は、反統合という反作用を生むと、宮永國子はこの現象を表現している。(宮永、20 頁)
- (37) Giddens, p.177 (邦訳 219 頁)
- (38) Žižek (2002), p.132 (邦訳 181 頁)
- (39) Žižek (2009), p.144 (邦訳 237 頁)
- (40) Giddens, p.21 (邦訳 35-36 頁)
- (41) Žižek (2009), p.25 (邦訳 49 頁)
- (42) これは、社会学で「心理化学」と表現されている現象である。ベックによれば、社会問題が満ち足りない気持ちや不安といった心的傾向の問題となり、社会の危機と個人の病気の関連性が直接的連関を持つようになったことが、心理学ブームの背景にあるという。(Beck, S.158-159 [邦訳 193 頁])
- (43) Žižek (2009), pp.28-29 (邦訳 53-54 頁) ミレールの発言の全文は、以下にて読むことができる。
http://www.lacan.com/symptom/?page_id=299 (最終アクセス日: 2011 年 9 月 26 日)
- (44) Žižek (2009), p.31 (邦訳 58-59 頁)
- (45) Žižek (1999), p.332 (邦訳 186 頁)
- (46) Žižek (2009), p.145 (邦訳 238 頁)
- (47) *Ibid.* (邦訳 239 頁)
- (48) *Ibid.*, pp.89-90 (邦訳 152 頁)
- (49) *Ibid.*, p.149 (邦訳 244-245 頁) 進歩の歴史が瞬間的に中断する「静止状態」に、ベンヤミンは彼が論じる意味での「革命」の可能性を見た。詳細は、拙稿「古層と根源」、『ICU 比較文化』第 40 号、2008 年。
- (50) *Ibid.*, p.150 (邦訳 246-247 頁)
- (51) 詳細は、以下の拙稿を参照。「再帰化と自己決定権」、『社会科学ジャーナル』第 67 号、2009 年。「象徴界は衰退しているのか」、『I. R. S. ——ジャック・ラカン研究——』第 8 号、2011 年。
- (52) 再編成の可能性については、以下の拙稿を参照。「再帰的近代化における普遍性と多元性の問題 地域の環境や伝統を再検討するための参照枠の在り方とは」、『科学技術社会論研究』第 9 号、2011 年。

参考文献

- 大澤真幸『現実の向こう』春秋社、2004年。
- 加藤尚武『世紀末の思想 豊かさを求める正当性とは何か』PHP研究所、1990年。
- 萩原優騎「古層と根源」、『ICU比較文化』第40号、2008年。
- _____「再帰化と自己決定権」、『社会科学ジャーナル』第67号、2009年。
- _____「再帰的近代化における普遍性と多元性の問題 地域の環境や伝統を再検討するための参照枠の在り方とは」、『科学技術社会論研究』第9号、2011年。
- _____「象徴界は衰退しているのか」、『I. R. S. —ジャック・ラカン研究—』第8号、2011年。
- 平川秀幸「リスクガバナンスのパラダイム転換——リスク/不確実性の民主的統治に向けて——」、『現代思想』2005年第5号。
- 宮永國子『グローバル化とアイデンティティ』世界思想社、2000年。
- 村上陽一郎『文明のなかの科学』青土社、1994年。
- _____『安全学の現在』青土社、2003年。
- Beck, Ulrich. *Risikogesellschaft: Auf dem Weg in eine andere Moderne*, Suhrkamp, 1986. (東廉、伊藤美登里訳『危険社会——新しい近代への道』法政大学出版局、1998年)。
- Beck, Ulrich, Giddens, Anthony & Lash, Scott. *Reflexive Modernization: Politics, Tradition and Aesthetics in the Modern Social Order*, Polity, 1994. (松尾精文、小幡正敏、叶堂隆三訳『再帰的近代化——近現代における政治、伝統、美的原理——』而立書房、1997年)。
- Fukuyama, Francis. *The End of History and the Last Man*, Penguin, 1992. (渡部昇一訳『歴史の終わり [上・下]』三笠書房、1992年)。
- Giddens, Anthony. *The Consequences of Modernity*, Polity, 1990. (松尾精文、小幡正敏訳『近代とはいかなる時代か? ——モダニティの帰結——』而立書房、1993年)。
- Klein, Naomi. *The Shock Doctrine: The Rise of Disaster Capitalism*, Henry Holt and Company, 2007. (幾島幸子、村上由見子訳『ショック・ドクトリン——惨事便乗型資本主義の正体を暴く—— [上]』岩波書店、2011年)。
- Lyotard, Jean-François. *Le Postmoderne Expliqué aux Enfants*, Galilée, 1988. (管啓次郎訳『こどもたちに語るポストモダン』ちくま学芸文庫、1998年)。
- Žižek, Slavoj. *The Ticklish Subject: The Absent Centre of Political Ontology*, Verso, 1999. (鈴木俊弘、増田久美子訳『厄介なる主体 政治的存在論の空虚な中心 [2]』青土社、2007年)。
- _____ . *Welcome to the Desert of the Real!: Five Essays on September 11 and Related Dates*, Verso, 2002. (長原豊訳『「テロル」と戦争 〈現実界〉の砂漠へようこそ』青土社、2003年)。
- _____ . *First as Tragedy, Then as Farce*, Verso, 2009. (栗原百代訳『ポストモダンの共産主義——はじめは悲劇として、二度めは笑劇として』ちくま新書、2010年)。

**Considering Slavoj Žižek's Analysis on Global Capitalism:
Through a Critical Reading of *First as Tragedy, Then as Farce* (2009)**

<Summary>

Yuki Hagiwara

Slavoj Žižek is a Marxist who is famous for his socio-analysis from the view of Lacanian Psychoanalysis. In his book *First as Tragedy, Then as Farce*, he considers how global capitalism has formed and developed from different angles by connecting theories of socio-analysis. The one is Naomi Klein's *The Shock Doctrine*, which became the center of public attention after the terrible earthquake in Japan in March, 2011. The purpose of this paper is to reconsider the relations of some theories of socio-analysis which have great influence now.

According to Klein, the history of capitalism was written in shocks. Infamous human rights violations have tended to be viewed as sadistic acts by anti-democratic regimes. On the other hand, however, they have been made use of to prepare the ground for the introduction of free-market reforms. An example is the US attack on Iraq. It is based on the idea that capitalism could be established while people would offer no opposition. They could smoothly receive the new order by turning them into an ideological tabula rasa.

Žižek criticizes that supporters of global capitalism never admit the origin of many hardships they face is itself. People were convinced of the victory of liberal democracy when Francis Fukuyama declared the end of history. However, they came to know that it was an illusion after the successive accidents such as 9/11. Žižek emphasizes the situation "the crush of civilizations" comes from capitalism, but which does not mean its end. On the

contrary, those who are against the West are also in the huge civilization whose name is global capitalism. This is the situation which Anthony Giddens calls reflexive modernization. Cultures have changed reflexively under the influence of globalization, which mentions globalization and localization are two sides of the same coin.

Giddens says the situation called postmodernity is not the end of modernity but the result of its development. According to Žižek, traditional orders and meta-histories do not function properly. Therefore people need tentative ethics as substitutes, but social conditions are still unstable. Žižek argues that it is impossible to suppose the existence of a big other as a basis of social order, and so bidding farewell to progressivism is important. It is an action to bring out the unrealized possibilities by reconsidering self-critically their truism which they are tied to.

